

アンヘラス大学で災害医療の特別講義を行いました (2018/1/6)

テーマ：健康で災害に強い社会をつくるには。災害と感染症のリスクマネジメント。

会場：Angeles University Foundation, School of Public Health (Angeles, フィリピン)

2018年1月6日(土)にフィリピンのアンヘラス大学大学院公衆衛生学専攻で江川新一教授が特別講義を行いました。

この講義は災害科学国際研究所と部局間学術交流協定を結んでいるアンヘラス大学において、災害医療についての講義要請にに応じて4年前から行っているものです。聴講者は、保健師、助産師などすでに実務経験のある社会人修士学生であり、医療人として身につけておくべき災害医療および災害に関連する感染症にトピックをあてて、アンサーパッドを用いた双方向性の授業を行いました。

江川新一教授は、災害のリスク=ハザード(ハザードへの曝露)×脆弱性/対応能力という簡単な式を用いて、災害リスクを減らすためには、どのようにハザード、脆弱性を減らし、対応能力を向上させるかを考えることの重要性について説明しました。ひと段落ごとに確認のための小テストをアンサーパッドを用いてリアルタイムに集計することで、聴講者の興味と理解が深まります。同時に、保健医療従事者としての興味を引き出すために、病気のリスクと災害のリスクを同じように考えることができることも提示しました。それによって、複雑に見える災害に対する備えや対応・復旧・復興も、病気に対する予防や治療、再発予防などと同様にリスクを低減させることだと理解することができます。

また、後半の災害と感染症では、外科医の視点から、感染という概念すら明確ではなかった時代に、産褥熱の発生に医師の手指衛生が関係していることを見出したオーストリアの医師 Ignaz Philipp Semmelweis を例にとり、ハザードとなる微生物に対する曝露を適切な方法で低減、予防すること、そのためには保健医療従事者の教育、個人防護資材(Personal Protective Equipment: PPE)だけではなく、一般市民および他のクラスターへの呼びかけと協働が必須であることによってはじめて効果的な予防や治療が可能になることを説明しました。

2014年に西アフリカで大流行したエボラウイルス感染症は、いまだに効果的な治療法が確立されていないのですが、保健医療従事者にしっかりと教育を行うことで、事態を収束させることができたことを示した研究成果(Jones-Konneh TEC, Egawa S, et al, Tohoku J Exp Med 2017)についても披露しました。

聴講者からは、気候変動で起きている干ばつのようなゆっくりとした災害にどのように備えるべきか、他のクラスターや、政府、地方自治体との協働を進めるにはどうしたらよいか、東日本大震災のときに日本人はどうしてパニックにならずに行動できたのか、HIVのような感染症に対してどのように感染を予防・早期治療し、増加を食い止めることができるか、など多彩な質問がありました。江川教授はすべてに正解はなく、解決はむしろ自らが考えるべきであることも断ったうえで、あらゆるリスクをどのように理解し、対応するかに集約されることを説明しました。リスクに対する考え方は、東日本大震災で起きた放射線災害やエボラウイルスに対する考え方とも共通します。ただむやみと恐れるのではなく、リスクをきたすものの性質を理解し、リスクに対する適切な管理(予防)を行い、適切な行動(対応)をとることで、解決への道筋が見えてくる可能性が高まることを示唆しました。講義に対する評価も、各講義の最後にアンサーパッドを用いて行います。2部構成の講義は、いずれも聴講者の約75%がとても面白かったとの高い評価を得ました。



災害医療、災害感染症に関して
講義する江川新一教授



アンサーパッドを用いた講義に熱心に参加する
公衆衛生学専攻の大学院生と教官



質問する聴講者



大学院公衆衛生学専攻の専攻長、教授陣と
文責：江川新一（災害医学研究部門）